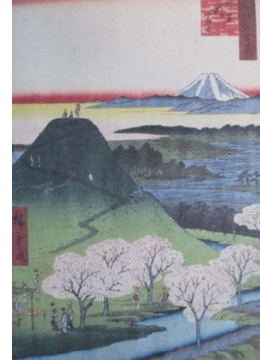


信じるココロ 信仰・迷信・噂話

太田記念美術館(原宿) 2022.02.04~02.27

江戸時代には、さまざまな民間信仰が庶民に親しまれ、浅草寺のような大寺院から町中の稲荷社まで、多数の寺社で毎月のように行われた縁日や出開帳のようなイベントは、数多くの人々で賑わったとされる。また、庶民の関心は、江戸市中に止まらず、近場では江の島の弁財天や大山尊社、遠方では富士山から伊勢神宮まで、人々は信仰のみならず行楽も兼ねて江戸の外に繰り出した。

本展は、当時の最新の世相を描いた「浮世絵」が、こうした流行を現代のSNSのように人々に伝え拡散する役目を果たし、他にも鯰が地震を起こすという迷信に基づいた「鯰絵」や、人魚が現れたという少々怪しいニュースを描いた作品まで、「信じる」をキーワードにして様々な浮世絵が紹介されている。



歌川国芳 《奪衣婆（だつえば）の願掛け》

少し困ったような顔をした老婆を取り囲むように、沢山の人々が手を合わせて拝んでいる。実はこの老婆は、内藤新宿の正受院に祀られていた奪衣婆（三途の川のほとりで亡者の衣服を剥ぎ取る鬼婆）像で当時の流行神のひとつ。

葛飾北斎 《諸国瀧廻り 相州大山ろうべんの瀧》 大判絵巻

日本各地の名瀑全8枚の揃物の一枚で、相模・大山の大山寺（石尊権現）は、江戸近郊であることから多くの人々が訪れ、大山講と呼ばれる団体を組み奉納する木太刀を持って登頂したという。本図は、民間信仰の対象である場所の開祖の名がついた「良弁の瀧」で水行を行う人々の様子が描かれている。

歌川広重 《名所江戸百景 目黒新富士》 大判錦絵

新富士は人の手によって築造された富士山を摸した約12mの高さの柴山で、ジグザグの道を上って頂上に立つと真西には富士山が見えて、天下を取ったような気になったのかもしれない。晩年に手掛けた118図の「名所江戸百景」の作品は、見る者の視覚に鮮烈に訴える「揃物の構図」で、幕末明治の手本となっただけでなく、「ゴッホ」らの印象派の画家達にも大きな影響を与えた。